クローン人間の生

――カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』――

佐　用　章　子

序

> The Nobel Prize in Literature for 2017 is awarded to the English author Kazuo Ishiguro "*who, in novels of great emotional force, has uncovered the abyss beneath our illusory sense of connection with the world.*"

これは 2017 年 10 月 5 日スウェーデン・アカデミーがカズオ・イシグロ（1954– ）のノーベル文学賞の受賞を発表したプレスリースである（Svenska Akademien）。「人と世界のつながりという幻想の下に口を開けた暗い深淵を、感情豊かにうったえる作品群で暴いてきた」というのがその受賞理由である（日吉 3）。

イシグロは 1982 年以来 7 編の長編を発表してきた。そのうち第 6 番目でイシグロの代表作のひとつである『私を離さないで』（*Never Let Me Go*, 2005）は、この受賞理由を最もよく理解できる作品である。武田将明（1974– ）は上記のイシグロのノーベル賞授賞理由に加えて「この幻想を突き破れば深淵に呑み込まれるかもしれないことも彼の文学は示唆している」と述べている（32）。この深淵とは何か。

イシグロはこの長編で主人公としてクローン人間を登場させている。それは 1 人称の語り手キャシーとヘールシャムという外界から隔離された寄宿学校で成長するトミーとルースである。彼らは学校生活の中で自分たちが外界の社会の人々の臓器移植のために臓器を提供するために作られたことを徐々に知ることになる。彼らは中年にもならない前に死を迎える運命

Studies in English and American Literature, No. 55, March 2020
©2020 by the Engish Literary Society of Japan Women's University

である。それは使命を終えるかのように “complete” という言葉で表現されている。イシグロはインタビューには非常に丁寧に応じる作家であり、大野和基（1955–　）のインタヴューでこの小説のために特別な世界を作らなければならなかったのかという問いに、このヘールシャムの特殊な世界を子ども時代のメタファーにしたかった、と答えている（175）。さらに、それが普通の人間が人生を生きていく過程の反映になるように書いた、と続けている（177）。本稿では、作家がクローンを通して我々が呑み込まれてしまうかもしれないどのような人生の深淵を見せようとしたのかを考えていきたい。

1.

一般に『私を離さないで』は作者の意図に拘らずディストピア SF 小説に分類されている。それは言うまでもなく人工的に作られたクローン人間の登場とその運命によるものである。この作品は SF という要素で人が人を作るという観点からみれば、古くはメアリー・シェリー（Mary Shelley, 1797–1851）の『フランケンシュタイン』（*Frankenstein*, or *the Modern Prometheus*, 1818）につながっている。しかしながらこの小説が 2005 年のイギリスの SF 文学賞の最終候補になった時、SF の評論家たちは強く反対した。その理由は本作には何ら科学がないということだった（イーグルストン 129）。『フランケンシュタイン』やオールダス・ハックスリー（Aldous Huxley, 1894–1963）の『すばらしい新世界』（*Brave New World,* 1932）のように人間の製造過程や臓器提供の場面は一切語られていないからである。

特にディストピア小説としてはそれを代表する作品であるハックスリーの『すばらしい新世界』とその 17 年後に発表されたジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903–50）の『一九八四年』（Nineteen *Eighty-Four*, 1949）の 20 世紀の作品の系譜として捉えられる。しかしイシグロの小説はこの二つのディストピア小説とは主に二つの違いがある。ひとつは『すばらしい新世界』は 1932 年に出版されたが、舞台が西暦 2540 年であり、1949

年に出版された『一九八四年』は題名通り 1984 年に設定されている。一方、2005 年に発表された『私を離さないで』は冒頭に 1990 年代末、イギリスと記されていて、その時代は未来ではなく近い過去である。上記と同じ大野のインタヴューでイシグロは『私を離さないで』が完成するまでの過程を語っている。彼自身によると、この小説は 3 回目の挑戦で書き進めることができた。最初に書き始めたのは 1990 年だが仕掛けとしてクローンを使うことは思いつかず、若者たちが核兵器に接触する設定にしたが上手くいかず断念した。2 回目は 90 年代半ばだがやはりうまくいかなかった。3 度目はイギリスが世界初のクローン羊ドリーを誕生させた後様々な議論が起こっていた 90 年代半ばで、核兵器の発想は封印して、科学上の発展を利用してクローン人間を思いついたと述べている（186–188）。クローン羊ドリーの誕生は 1997 年 2 月に *Nature* で公表されヒステリックと言えるほどの議論を巻き起こした（Harris 19）。クローン羊の誕生の前 1978 年には世界で初の「試験官ベビー」が誕生し、それ以後生殖補助技術がますます発展しクローン技術に至った。イシグロがこの小説に 3 度目に挑戦し出版に至った時は、クローン技術は農産や畜産の生産性向上や希少動物の保護に盛んに応用され、すでにヒトのクローンを作る十分な技術があったと思われる。従って、イシグロのこの小説は未来を空想したり予測するものではない。

もう一つの違いは、前者の二作品は全体主義の社会を描いた政治批判であるが、イシグロの関心は人間とは何かにあり、未来への警告ではないことである。『すばらしい新世界』では、人間は孵化条件付けセンターで生産され生まれた時から 5 段階の階級に分けられ保育士に育てられ、後にそれぞれの階級の役目を果たす。これが社会安定の制度である。『一九八四年』では絶対君主ビッグ・ブラザー率いる党が国を支配し、国中監視システムが張り巡らされ人間を抑圧している。一方『私を離さないで』では、ヘールシャムで主人公やその他のクローン人間の子どもたちは監視されることもなく芸術や文化を重視した最高の教育を受けている。彼らの存在は外の

社会では公然の秘密であるが、口に出されることはない。ここでの生活の記憶が、キャシー、トミー、ルースがここを巣立った後の彼らの人生を支えているのだ。

2.

23 章から成るこの小説は三部構成になっている。第一部はキャシーのヘールシャムでの生活が描かれ、第 2 部はヘールシャムを巣立って自立して暮らすコッテージでの生活が語られている。第 3 部はキャシーが看護人となってコッテージを去り、初めての提供へ向かうまでが語られている。第 1 部のヘールシャムでの出来事はこの作品で重要な役割を果たしており、キャシーのヘールシャムの記憶を辿って行くことにする。『私を離さないで』は “My Name is Kathy H. I'm thirty-one years old, and I've been a carer now for over eleven years.” という言葉で始まる（Ishiguro 3, 土屋政雄訳九、以後著者、訳者を省略）。多くのイシグロ作品がそうであるように 1 人称の語り手によって淡々とした語り口でそれまでの過去が語られていく。その語り手のキャシーは 31 歳の若さで間もなく臓器提供することが決まっており、すでに死に向かっている。彼女たちは「提供」の前に看護人となるための講習を受け、集団生活からひとりひとり去っていく。キャシーは看護人として車で移動する道すがら、すでになくなったヘールシャムの面影をあちこちで探しながらトミーやルースと過ごしたヘールシャム時代を語る。それは一種の青春物語でもある。

キャシーはヘールシャム時代を次のように述べている。

> わたしのヘールシャム時代の記憶は、最後の数年間とそれ以前という二つにはっきり分かれています。これまでは、「それ以前のことをお話ししてきました。一年一年の区別も判然とせず、全体として黄金色の時が流れたという印象が残っています。当時のことを思うと、いやなことも辛いこともひっくるめて心がほのぼのしてきます。一方、「最後の数年間」はまったく違いました。決して不幸な年月だったというの

> ではありません。大切な思い出がいくつもある数年間でしたが、深刻な思い出も多く、前半より暗い期間だったことは否めません。(76、百二一)

ヘールシャム時代の前半では毎週のように行われる異常なほど丁寧な健康診断を疑うこともなく、男子はスポーツに興じ、女の子はおしゃべりを楽しんだ。生徒が作ったものの交換会 (the Exchanges) や、外部から品物を入手する唯一の手段だった販売会 (the Sales)、優れた制作物を展示すると思われていた展示館 (the Gallery) の話など、学習ばかりではなく学習以外の学校生活も語られる。この時代は諍いがあっても子ども同志のことであり、絆が作られていく「黄金色の時」として記憶され後年ノスタルジアとなって頻繁に思い出される。

イシグロはこの小説が出版された 2005 年にラジオのインタビューで子ども時代について次のように語っている。

> I guess we might look back to that, and we realize that, okay, we were fooled to some extent, but perhaps we hold in our hearts to some extent a memory of time when we thought the world was a slightly kinder place than the one we eventually found it to be. And so, I think that sense of nostalgia is quite important. It's almost like that kind of nostalgia is to the feeling, to the emotions what idealism is to the intellect. It's a way of holding in your memory a picture of better world than the one we find ourselves in. (Bates 199–200)

冒頭でも述べたように、イシグロはヘールシャムという世界を子ども時代のメタファーと考え、子どもは大人に保護され人生の厳しい現実から守られていて、外の世界で何が起こっているかわからないという牧歌的な状態を作りだしている。そしてこの時代を大人になっても心の中に抱いていて、そのようなノスタルジアは重要である、と述べている。

実際、最終章でキャシーはルースを失いトミーを失った後、車を走らせながら二人の記憶と同時に無意識にヘールシャムを探している自分に気付く。そして「. . . どこのセンターに送られるにせよ、わたしはヘールシャムもそこに運んでいきましょう。ヘールシャムはわたしの頭の中に安全にとどまり、誰にも奪われることはありません」と語る (281、四三八)。記憶が死に勝利する瞬間である。

一方、ヘールシャム時代の最後の数年間は「深刻な思い出」も多く、「暗い時期」だった。最後の数年間は 18 歳ごろに学校を巣立つまでの数年間である。前半から後半にかけて暗転していくのは、今まで気付かなかったことに気付くようになった生徒の成長を意味している。しかし後半や終盤で明らかになることの種は前半に蒔かれている。たとえば、トミーはキャシーに「先生が言うには、おれたちは教わっているようで、教わっていなんだってさ」というルーシー先生の言葉を伝える (29、四十八)。この言葉を二人はよく理解することができない。しかし二人が 15 歳になった時、ルーシー先生は、一人の生徒が俳優になるためにアメリカに行きたいと言っているのを聞いた時、次のように話す。

> あなた方は教わっているようで、実は教わっていません。. . . . あなた方は誰もアメリカには行きません。映画スターにもなりません。. . . . あなた方に老年はありません。中年もあるかどうか . . . 。いずれ臓器提供が始まります。あなた方はそのために作られた存在で提供が使命です。一つの目的のためにこの世に産み出されていて将来は決定済みです。. . . . 間もなくヘールシャムを出て行き、最初の提供を準備する日がくるでしょう。. . . . みっともない人生にしないため、自分が何者で、先に何が待っているかを知っておいてください。(79–80、百二六－百二七)

今まで慎重に隠されていた事実が明らかになる場面である。

さらにヘールシャムを去りその後コッテージで暮らしていた時、条件を満たせば提供が猶予されるという噂を聞いた時、トミーはヘールシャムを

振返り、「あの頃、辻褄の合わないことがいろいろあったのも事実だ。. . . . もし、あれが――あの噂が――ほんとのことなら、いろいろと説明がつく。おれたちの頭を悩ましてきたあれこれの説明がつく」と話す（172、二六九）。ヘールシャムでの生活にはその後明らかになることのヒントが散らばっていた。

また、時々学校にやって来るマダムが冷ややかな視線で生徒たちを遠ざけるのを、生徒たちを怖がっているからだ、と言ったルースの言葉を証明するために、マダムを試す計画が練られた。マダムが現れる時 6 人が潜んでいて、一斉に飛び出しマダムの反応を見るというお遊びのようなものだった。しかし、子どもたちはマダムが恐れ戦くのを見て大きな衝撃を受けた（33–35、五四–五八）。ずっと後になりキャシーとトミーがエミリー先生とマダムを訪問した時、キャシーは「マダムはわたしたちが嫌いです。普通の人が蜘蛛か何かを怖がるみたいに、わたしたちを怖がっていました」と言う。それに対して主任保護官だったエミリ先生は、「. . . あなた方を怖がっていた？　それはわたしたち全部ですよ。. . . . あなた方への恐怖心を押さえるのに必死でした。. . . . 嫌悪感で体中が震えこととだってあります . . . 」と答えた（263–264、四百十–四十一）。これらのことから、ヘールシャムがクローンの子どもたちにとって外界から遮断された居心地の良い場所であった反面、外の世界の大人たちがクローン人間の反抗を恐れるためクローンを隔離していた場所だったと推測することができる。

エミリ先生はまた、「保護することがわたしたちの運営理念でした。それはときに物事を隠すことを意味しました。嘘もつきました。わたしたちはいろいろな面であなた方をだましていました」と話す（263、四〇九）。ヘールシャム（Hailsham）とは「まがい物万歳」（イーグルストン　133）であり、インチキを歓迎する所だったのである（荘中　164）。イーグルストンは、「学校は質の良い強制収容所、もしくは何らかの理由で集団殺害が少しばかり延期された . . . ゲットーのような場所」とも述べている（133）。本作の第 5 章ではヘールシャムの裏手の丘にある森への言及があり、友達と

喧嘩して森から敷地外へ逃げた男の子が両手、両足を切り落とされていた、という話や、外の世界を見たくてフェンスを乗り越えた女の子は中に戻してもらえず迷って死んでしまい幽霊として出てくる、という話もあり、森は恐怖の対象だった（50、八〇–八一）。第 7 章ではルーシー先生の英語の授業で何かのきっかけで、第二次世界大戦で捕虜になり収容所に入れられた兵士のことが話題になった。男子の生徒が収容所の周りのフェンスには電気が流れていたと話す。そこで生徒たちがフェンスに手を伸ばして感電死する真似をして大騒ぎになった（77、百二十二）。この二つのエピソードはヘールシャムの本来の目的を暗示していると考えられる。

3.

キャシーたち 3 人を含めて何人かのヘールシャムの生徒たちは 18 歳前後でヘールシャムを離れコッテージと呼ばれる廃業した農場を利用した施設で自立した生活を始める。第 1 回提供のためや看護人として出ていくまでに数年間を過ごすのだ。行動の自由が与えられ、遠出もできるのになぜクローン人間たちは逃亡しないのか。これは多くの読者が抱く疑問である。彼らが唯一望んだのは、結局は噂に過ぎなかったと判明するが、臓器提供実施の中止ではなく猶予のみである。彼らは臓器提供を義務と受け入れている。例えばジュマロ（Olga Dzhumaylo）は “One of the most controversial question is why cloned protagonists, for all their fine emotional inner life, prove unable to resist a fate that is sanctioned by others and which results in their inevitable death.” と疑問を呈している（91）。この問いに多くの研究者たちが答を探してきた。ジュマロは、この問いへの答を、モーラン（John Mullan, 1958– ）のインタヴューでのイシグロの話の中に、以下のように見出している。

> . . . he talks about the philosophical acceptance of death as a common predestination, a shared human heritage, the idea of which is most poignantly expressed in his novel about clones.（91）

死を受け入れることは予め決められた運命であり、誰にでも共通しているものだから、逃げないのだという考えである。

イシグロと同じくブッカー賞受賞者であるマーガレット・アトウッド（Margaret Atwood, 1939– ）は奴隷制度に例えて次のように書いている。

> The outer world wants these children to exist because it's greedy for the benefits they can confer, but it doesn't wish to look head-on at what is happening. We assure — though it's never stated — that whatever objections might have been raised to such a scheme have already been overcome. By now the rules are in place and the situation is taken for granted — as slavery was once — by beneficiaries and victims alike.（1）

このような組織的な大略は反対論があっても、外の世界の臓器の受益者ばかりでなく提供者にもかつての奴隷制度のように社会に定着しているのだ、と述べている。これはイーグルストンの、広く知られているが熟慮の上共同体が隠蔽する公共の秘密という考え方と共通しているものがある（124）。彼は本作は隠蔽されると同時に力を付与される公共の秘密を中心に描いていると述べている（125）。

森川慎也（1976– ）はなぜクローンたちは逃げられるのに逃げないのかという問いに、イシグロが『わたしを離さないで』に最初に取りかかった1990年代と、一旦中断して再び執筆を続けた1990年代後半の思想家、つまりイシグロと同時代の思想家が提起した人間認識をイシグロが共有していると考える。前者の思想家はピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu, 1930–2002）で、後者はスタンリー・フィッシュ（Stanley Fish, 1938– ）である（241–255）。森川はロクナー（Liani Lochner）のブルデューのハビストス（慣習や表象を生み出し組織化する原理）とドクサ（信念、根本的前提）を用いたこの作品の読解と、フィッシュの信念の定義を用いてクローン人間たちの受動性を説明する。フィッシュによれば、信念は合理性に先行し、「選べないし、捨てられない。拒否もできなければ、検討もできない」もの

である (244)。「信念を共同体で広く共有される慣習と捉え、」「個人は限られた視野からしかものを見られず、その視野もおおむね個人の属する集団で共有される慣習に規定されるというのがフィッシュの認識である」(245)。

一方、イシグロも人間を受動的存在と見ている。イシグロの人間観は次の言葉で語られている。

> I suppose the big thing about *Never Let Me Go* is that they never rebel, they don't do the thing you want them to do. They passively accept the programme in which they are butchered for their organs. I wanted a very strong image like that for the way most of us are, in many ways we are inclined to be passive, we accept our fate. Perhaps we wouldn't accept this to *that* extent, but we are much more passive than we'd like to think. We accept the fate that seems to be given to us. We accept the conditions that are given to us. (Matthews 124)

私たちは自分が考えている以上にずっと受け身で、自分たちに与えられたかのように見える運命を受動的に受け入れてしまう、という考えである。言い換えれば人間の本質は受け身である、ということであり、この考え方がイシグロの評価が分かれるところである。作中のクローン人間はこの資質を備えているように作られていると考えられる。読者が逃亡や反逆を期待することはイシグロの人間観と齟齬があることになる。

結び

ヘールシャムで育つクローンたちが提供という自分たちの使命に、または「信念」に従うのは、ヘールシャムでの教育によるものである。生徒たちにとっては懐かしい思い出の場所ヘールシャムは、同時にブレデユーのハビストスとドクサ、並びにフィッシュの言う信念が形成される周到に準備された場所である。交わされる言葉は婉曲表現が使われ、“organ giver” は “donor”, “organ transplantation” は “donation”, “rehabilitation center for

donating clones” は “recovery center”, “death” は “completion” となっている（Cheng 58）。また学校の先生は “guardian” つまり保護官であり、クローンの製造元は “possible” である。このような婉曲表現は実態を気付かせないための配慮である。

さらにヘールシャムの生徒は他のクローンに比べはるかによい待遇をされている。そのため、義務の遂行に誇りを持つほどになる。キャシーは冒頭の自己紹介に続いて、「わたしが介護した提供者の回復ぶりは、みな期待以上でした」と述べ、実はそれが殺人に加担していることには気付かない（3、九）。18 章では、「介護人をすることで、わたしの最良の部分が引き出されたと言えるかもしれない」と言う。提供者の苦痛と不安を目の当たりにしてついに使命を終えた時の辛い時に、当局から「最善の努力に感謝します。これからもよい仕事を続けてください」という手紙がくると、それでは慰めにならないと不満を表すが、介護することが命を終わらせることにつながることに気付かない（203、三一五）。トミーは「これでも提供者としては優秀だぜ。介護人は落第だったけれどな」とすでに 3 度目の提供を終えていることを自慢する（223、三四六）。

この小説は教養小説の構造となっているが、クローンたちは成長を遂げない。忠実に義務を果たすことが、命を奪い、自らも消費されていくことを理解できない。彼らの信念は変わることがないのだ。これはイシグロの 3 番目の長編『日の名残り』（*The Remains of the Day*, 1989）の主人公スティーブンスと同様である。愚直に執事としての仕事をこなす彼は、執事としての視野を超えることはない。

ノーベル賞授賞理由で述べられた「幻想の下に口を開けた暗い深淵」について、幻想とは共同体で醸成された信念に従って忠実に人を助けると思われる職務に励むが、呑み込まれてしまいそうな深淵はその行為が実は人間性を失った行為であることに気付かないことである。彼らが命を縮める度に外界の人間は生を延ばす。ヒューマニズムの喪失である。イシグロは柴田元幸（1954– ）のインタヴューで『日の名残り』に関して、「我々の大

半はみな何らかの意味で執事である」(202) と語ったが、イシグロによれば、同じく我々のほぼすべてはこの小説に登場するクローン人間なのである。

引用文献

Atwood, Margaret. Brave New World." *Slate,* 1 Apr. 2005, www.slate.com/id/2116040/.

Bates, Karen Grgsby. "Interview with Kazuo Ishiguro." *Conversations with Kazuo Ishiguro*, edited by Brian W. Shaffer and Cynthia E. Wong. UP of Mississippi, 2008, pp. 199–203.

Cheng, Chu-chuen. *The Margin without Center.* Peter Lang, 2010.

Dzhumaylo, Olga."What Kathy Knew: Hidden Plot in *Never Let Me Go*". *Kazuo Ishiguro in a Global Context*, edited by Cynthia F. Wong and Hulya Yildiz Ashgate, 2015, pp. 91–100.

Eaglelstone, Robert. "The Public Secret." *The Broken Voice: Reading Post-Holocaust Literature.* Oxford UP*, 2017.* pp. 9–27.「公共の秘密」金内亮訳『カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を読む』. 田尻芳樹・三村尚央編。水声社、2018、pp. 116–144.

Harris, John. *On Cloning*. Routledge, 2004.

Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. Faber and Faber, 2005.

Matthews, Sean. "'I'm sorry I Can't Say More': An Interview with Kazuo Ishiguro." *Kazuo Ishiguro Contemporary Critical Perspectives*, edited by Sean Matthews and Sebastian Groes, Continuum, 2006, 114–125.

Svenska Akademien. "The Nobel Prize in Literature 2017" Press release, 5 Oct.2017, www.nobelprize.org/prizes/literature/2017/press release/.

イシグロ，カズオ『わたしを離さないで』土屋政雄訳、早川書房、2008 年。

大野和基『知の最先端』PHP、2013 年 pp. 171–212。

柴田元幸 (訳)『ナイン・インタビューズ　柴田元幸と 9 人の作家たち』アルク、2004 年 pp. 201–244。

荘中孝之『カズオ・イシグロ――〈日本〉と〈イギリ〉の間から』春風社、2011 年。

武田将明「幻想の奥に潜む現実暗示」日本経済新聞 2017 年 10 月 8 日、32。

日吉信貴『カズオ・イシグロ入門』立東舎、2017 年

森川慎也「クローンはなぜ逃げないのか――同時代人の人間認識とカズオ・イシグロの人間観」『カズオ・イシグロ「わたしを離さないで」を読む』田尻芳樹、三村尚央編　水星社、2018 年 pp. 241–255。